

## 北京・上海における恋愛

### ——一九二〇—三〇年代初期の小説を中心に

津 守 陽  
小 川 主 税  
鄭 麗 洲  
林 麗 婷

#### 序言

近代中国の都市をめぐる記憶とイメージに関する研究は近年盛んに行われてきた。他方で近代都市のイメージは、たとえば「老北京」「魔都上海」といったある種のステレオタイプとして、テレビドラマなど一般社会においても消費され続けている。今回のパネルでは、北京と上海の二大都市を舞台あるいは創作背景にした、一九二〇年代から三〇年代初期までの作品を扱い、当時青年たちの最大の関心事でもあった恋愛を共通の切り口とすることで、あらためて文学および作家と都市との関係について考察した。今回比較検討した作家たちは、通常の文学史であれば左翼作家・五四新文学作家・通俗作家と、やや異なるカテゴライズのもとに取り上げられることの多い、胡也頻・盧隱・張恨水である。

小川報告は、左翼作家としてのみ評価されがちであった胡也頻について、初期の恋愛小説に焦点を当て、むしろ彼を恋愛作家と見ることができると指摘する。とりわけ一九二五—二八年、北京から上海へと拠点を移しながら、丁玲との恋愛・同居関係が複雑によじれていく時期の胡也頻の作品には、彼の恋愛をめぐる苦悩の軌跡がくつきりと刻まれていることを、小川報告は丹念に分析する。そして精神恋愛の理想を謳歌できた文化城北京での生活を脱し、恋人女性の浮気と強気に困惑し苦悩する、革命の街上海での恋愛破綻を経験したことが、むしろ胡也頻の作家的成長を促し、自分の内面に入り込む作風を確立したと結論づける。

鄭報告は、石評梅と高君宇の悲恋をモデルにしたとみなされてきた盧隱『象牙戒指』（一九三四）について、作中における北京のモダンな風物およびモダンガールたちの振る舞いの活写に着目し、それ

らが果たす役割を分析する。作中ではロマンスを語る場としての西山、上層階級のモダンな男女がデートする場所としてのスケート場や北海公園、モダンガールの「頹廢」の象徴としてのダンスホールや喫煙が意図的に配置され、主人公沁珠の人物像を織りあげて行く。分析を通して見えてくるのは、恋愛に破れ恋に臆病になる一方で、男性を誘惑し自堕落に遊ぶことで身を持ち崩して行く、矛盾に満ちた女学生あるいはモダンガール沁珠の姿である。その矛盾に苦しむ姿は、作家がモデルと称する石評梅よりも、むしろ恋愛と結婚に苦しんだ廬隱自身の生涯を反映している、と鄭報告は指摘する。

林報告は、従来ヒロインの沈鳳喜に注目が集まってきた張恨水『啼笑姻緣』（一九三〇）について、物語を推し進める役割を果たす女侠関秀姑に焦点を当てることで、通俗小説における女性像再評価の可能性を探る。意図的に設けられた関秀姑と十三妹との類似性やその結婚に関する作家の談義から、張恨水が「結婚しなくて良い」、むしろ「結婚してはならない」女性像を作り上げたことが見えてくる。さらに『金粉世家』（一九三二）では恋愛の失敗としての離婚、恋愛の成就としての侍女の家出、金銭目当ての妻たちの家出が描かれる。令嬢と侍女、伝統的詩文や才子佳人小説と現代的映画、中国での生活と西洋世界の経験など、この小説がさまざまな二項を複雑に絡ませ、時に既存の路線を転倒させる形でバリエーションに富む恋愛の様相を叙述していることが、林報告から明らかになる。その中で北京と上海はそれぞれ、恋愛に破れた記憶の中で寂しげに暮らす街と、家出した妻たちのような女性を堕落に誘う逃げ場所としての街という固定したイメージで語られる。

今回のパネル報告が左翼文学・新文学・通俗文学というカテゴリー

ーを一旦取り払い、同時期到北京と上海での恋愛模様を描いた作品として三名の作家を読み合わせてみることで、興味深く浮かび上がってきた点は数多い。まずは何よりも、「文化城北京」「革命とモダンの街上海」という都市イメージの典型のみに留まらない北京像・上海像が、それぞれの都市の只中に生きる作家たちの手によつて、文学作品の細部に鮮明に表現されていることがよく伝わってくる。スケートを楽しむ女学生たち、女侠もモダンガールもデートコースとして好む公園、こうした近代都市としての北京のディテールは、「京味」ものの描き出す「老北京」とはやはり一線を画している。

典型や定型に留まらないのは都市イメージだけではない。これらの報告を通して、従来五四新文化運動以降の知識青年たちによつて聖視されたと考えられてきた「自由恋愛」も、実際には「自由」「恋愛」の内実にさまざまな理解の幅とギャップがあり、実践者としての若者たちを苦しめる側面もあったことがわかる。狭い下宿先の部屋で、精神的恋愛で結びついていたはずの恋人女性が「自由」に「恋愛」していく姿に苦しむ胡也頻の懊悩と、彼の描き出すある種うじうじした男性像とは、革命とモダンの街上海の若者たちをより身近に感じさせてくれる現代性を帯びている。

カテゴリーを取り払ったことでより興味深く感じられるもう一点は、表象行為の中に、伝統と現代、新と旧、男性と女性、現実と理想、倫理と頹廢、主体と客体、社会階層としての上層と下層、ステレオタイプとその転倒、といったさまざまな二項が入り組んだ形で結びつき、これらに変数として働くことで、それぞれの小説世界が生き生きと構成されているのだ、という感触である。廬隱の女学生は誘惑的なモダンガールとして消費されるだけでなく、自らもその

「まなざされる」存在としての女学生像を意識し、その自意識の中で振る舞っているように見える。胡也頻と丁玲の証言を突き合わせで見えてくるのは、おそらくそれぞれの個人において正しい「理想」や「自由」があり、かつはつきりと明言しづらい隠れた「欲望」もある中で、それらが抜き差しならぬ矛盾として衝突する場として恋愛が機能してしまっていた、という側面である。そして通俗作家としての張恨水は、モダン上海の読者を意識した北京像を描く中で、巧みにステレオタイプと転倒とを組み合わせ、伝統と現代の価値観の狭間で新しい事物としての恋愛を描いて行く。表象行為にともなう作家の自意識の興味深さを、本パネルの各報告はあらためて認識させてくれたと考えられる。

